訪中雑記（明治大学客員研究員　纐纈厚）

2025年8月21日から26日まで、予想に反して随分と涼しい中国の長春と北京を訪れた。一昨年12月、中国社会科学院日本研究所と研究交流協定を締結。その前後併せて四度も同研究所から研究員が来学され、研究交流を重ねてきた。一度に4名から5名の訪問であった。その返礼の意味もあり、今回は佐原徹哉所長（政経学部教授）、小林尚朗客員研究員（商学部教授）、私（纐纈）と3名が同研究所との交流に臨んだ。

8月25日午後の北京。当初は同研究所と私共研究所との研究交流の予定であったが、今年は戦後80年目に当たるということで、「中国人民戦争と世界反ファシズム戦争勝利80周年記念新書発表会及び国際学術シンポジウム」と称する80名ほどの参加者を得たシンポジウムに私たち三人も報告者として参加。中国社会科学院日本研究所からは楊伯江所長はじめ、総勢33名の研究員が参加。報告者は10人。私たち3人の他に宋成有北京大学教授、蘇智良上海師範大学教授、張躍斌中国社会科学院世界歴史研究所研究員など、私には馴染みの先生方と一緒に登壇。

報告タイトルは、佐原徹哉研究員が「世界的極右の台頭を背景とした新たな『人種戦争』の登場」、小林尚朗研究員が「戦後国際秩序の変容とアジア地域経済協力の必要性」、纐纈が「日本の政治思潮と中日関係－浮上するアメリカ離れ志向－」であった。そして、閉会式の場で報告者10名の総括を纐纈が担当。10名の多様なテーマに対する報告を1人1分平均、併せて10分余で要約・批評するのは大変であったが、それはそれで愉しい時間でもあった。

シンポジウムの終了後、日本研究所との懇談会が開かれた。出席者は、楊伯江所長、金瑩研究員（日本研究所歴史研究室室長）、唐永亮研究員（科研処処長）と私共3人の6名と所長の秘書である程玉浩女史の7名。

そこでは第一に日本研究所から私共の研究所機関誌への寄稿の要請を行った。楊所長からは、「国際武器移転」の名称と内容が中国では十分に理解が進んでいないこともあり、その内容に沿った論文の寄稿については若干躊躇するところがある、との見解を吐露された。これに対し纐纈から、ホームページにアップされている目次を観れば、かなり広範なテーマの論文が掲載されており、広義には社会科学論文であれば掲載対象論文となること、英語か日本語で御願いしたいが、充分に精読させて頂いたうえで加筆修正の必要があれば、その都度忌憚なく申し入れを行うことなど、寄稿へのハードルを押さえる工夫をしていくことで了解頂いた。楊所長からは、その代わり国際武器移転史研究所から日本研究所の機関誌に寄稿も御願いしたいとのことであり、早速私の報告を原稿化して寄稿して欲しいとのことであった（この件については、纐纈は帰国後原稿化作業を進め、9月5月に寄稿済みである）。今後、双方の研究所員の相互の寄稿が進むことを期待したい。

第二に共同シンポジウムの件について、楊所長も非常に積極的で1～2年に一度は開催を定例化したい、とのこと。早速来年度、北京で開催することを約束。佐原所長からは、二つの研究所以外の国からも研究者を招き、文字通り国際シンポジウムの内実を伴った形にしたい、との要望が出され、楊所長も了解された。国外から招聘する場合、経費などの問題も生じるので北京開催の場合は中国在住の外国人研究者に声掛けするなどの選択もあろうとうとのことであった。この後、懇親会の場でも意見交換を行った。中日双方の研

究所の研究交流が今後も確実に進展することを充分に予感させる有意義な懇談会及び懇親会であった。

なお、私はこれに先立ち21日、大連に降り立ち、大連北駅から高速鉄道（中国の新幹線）で長春に移動。翌日の22日、同市の吉林大学で「日中戦争と日本の戦争責任－錦州爆撃を例として－」と題し、約1時間半の講演を行った。教員・院生など70名程が出席。質疑応答では8名程の受講者から質問を頂き、質疑応答の時間も含め有意義な時間を過ごした。

続いて翌日の23日には吉林大学主催の「中国人民抗日戦争と世界反ファシズム戦争勝利80周年」と題するシンポジウムが開かれた。私は「抗日戦争の現代史的意義と未決の日本の侵略責任」と題し、中国の抗日戦争が「開かれた総力戦」として戦われ、日本は「閉ざされた総力戦」として中国侵攻を続けたとし、その差異が勝敗を分けたのではないか、との趣旨で報告。報告者が15名程、参加者が200名を超える大きなシンポジウムであった。

24日午前中に北京に移動。午後3時から中国中央テレビ（CCTV）の4チャネル「国家記録」と題する定例番組のテレビ取材を受けた。同番組は日本近現代史に関する歴史問題を扱う専門チャンネル。3時間近くに及ぶロング・インタビューであった。「明治国家の台湾植民地問題と現代日中関係」がテーマ。1874年の台湾侵攻（牡丹社郷事件）から始まり、1895年以降の台湾植民地統治の実態等々、結構広範な質問が凡そ20項目。また、25日の午前中、日本研究所主催のシンポジウムに参加する前に、新装なった国家歴史研究院内にある中国社会科学院近代史研究所で2時間ほどの講演。高国策同研究所副所長の挨拶と司会で、20名程の同所員の研究者との活発な質疑応答の時間を持った。

短い時間に随分と予定を詰め込んだスケデュールであったが、冒頭に述べた如く、東京より10度は低いと思われる気温に恵まれた。少々早いが「北京秋天」を思わせる陽気。訪中の一週間前、講演のため韓国ソウルを訪問したが、この折には集中豪雨に見舞われ、冷涼であった。涼しい韓国と中国。いつまでも暑い日本。一体どうなっているのであろうか。（纐纈厚）

追伸：なお、纐纈の日本研究所での講演は中国語で原稿化し、「当代日本政治思潮探析」（中国社会科学院日本研究所編刊『日本学刊』2025年第6期、1～20頁）と題し、2025年10月に発表済である。